

5 . バラの伝説 (ミンダナオ)

昔々、ミンダナオの地に、スルタン・スラマイという強くて力のある王様が住んでいました。スルタンにはただひとりの子、彼が最も可愛がっている宝物、「プトリ・サリキット」と呼ばれる美しい娘がいましたが、まさに彼女は「ミンダナオの王女」でした。

その王女は、本当に見るべき存在でした。彼女の金色に輝く茶褐色の肌は、初々しく、柔らかで、赤ちゃんの肌のようにでした。彼女の深い、催眠術にかかっているような魅惑的な目は、高価な南海の黒真珠のようにでした。彼女の長く、黒い髪の毛は、磨き上げた黒檀のようにきらきら輝いていました。それは何百ものかすかに光る白真珠のように、編まれて、飾られていました。しかも、一番大切なことは、東洋の優雅さで魅了する、立ち振る舞いでした。彼女は本当に忘れられない美しさをもっていました。

彼女が小さな子どもの時から、彼女の父は常に王女に、いつの日にか、彼女はミンダナオの女王になる、と話していました。そして、女王はただ美しいだけではなく、人びとの模範として、偉大な、力強い兵士として、戦いに行く彼女の軍隊を指導する力があり、彼女の敵から祖国を保護し、防衛しなければなりません。

彼女の気高い先祖を誇りに思い、故郷とその人びとを誇りに思い、王女は父の聡明は言葉を心にとめて、彼女が歩けるようになると、すぐに馬の乗り方を学びました。剣を持ち上げる力を持つと、毎日剣術の練習をしました。美しい王女が熟達した兵士になり、風よりも速く馬を走らせ、彼女の父の軍隊の兵士たちのだれよりも強くなるのに、そんなに時間はかかりませんでした。

彼女は戦場では、敏捷で強健な兵士でしたが、父であるスルタンに対しては、王女は常に、優しく、穏やかで、思いやりのある娘でした。彼女は父の生活を誇りに思い、どんな父親が要求するよりも、彼女は父に愛と幸せをもたらしました。

自然と美しい王女には多くの賞賛者ができました。これらの求婚者の多くは、王家の血を引く人々で、喜んで彼女と結婚したいと望んでいました。しかし、問題があったのは、彼らはだれも、彼女の父が、結婚のために要求している高額な結納金を出す余裕がありませんでした。すてきで、勇ましいラハ・バガラムも例外ではありませんでした。

ラハ・バガラムは、長年、王女を遠くから羨望のまなざしで見えていました。しかし、スルタンは、いつも彼のかわいい王女を保護していたので、彼女と訓練する兵士以外は、だれもこの若い女性に近づくことはできませんでした。

ラハ・バガラムは、隣りの王国の唯一の王位継承者でした。彼は大変裕福で、王女、プトリ・サリキットと結婚するための結納金を支払うのはたやすいことでした。しかし、王子は、スルタンの娘と結婚するために、スルタンに近づく前に、恋しく思っている王女と近づき、彼女も彼のことを愛してくれているか、知りたかったのです。彼は真実の愛を望んでいたのです。

しかし、スルタンは愛する娘をがっちり守っているので、王子は王女に近づいて、彼女とふたりきりで時間を過ごすことはできないことを知りました。彼は、王女と結婚することは不可能であるという悲しい事実を知って、断念するように自分に言い聞かせていました。

ある、太陽に輝く朝、プトリ・サリキットは、この日、森の近くで過ごしたなら、素晴らしい日になるだろうと考えました。

王女は自然を愛していました。そこで、彼女と側近の召し使いたちは、林へ遠足にでかけました。

森の中央で、王女は美しく、平穏な場所を見つけました。高く真っ直ぐな細長い椰子の木に囲まれた空間で、その椰子の木は堂々と空を指し、それらのとがった葉は、光と熱帯のそよ風の中で穏やかに揺れていました。椰子の木の真下で、堂々とした古い情熱の木が、新鮮なオレンジと赤の花を暖かな朝の陽光の中で輝くように開かせて、立っていました。情熱の木は色鮮やかな花のいくつかを下の草の上に落とし、緑と赤とオレンジの湿った絨毯を作りました。

王女は穏やかに、草と花の絨毯の上に座り、彼女の見つけた、牧歌的で魔術的で平穏さのあるその環境に不思議なものを感じていました。彼女の召し使いたちは肩のカバンから楽器を取り出し、柔らかく、美しい旋律の音楽をそれから奏でて、それらは、牧歌的な環境に溶け合っていました。木にとまっている鳥たちでさえ、その旋律に調和したコーラスを加えていました。

一羽のさえずっている鳥が、枝から、微笑んでいる王女の近くの地面に降りてきました。そこで、その鳥は鋭いくちばしを使って、湿った地面から

フィリピンの神話と伝説

太ったおいしい虫を引っ張り出しました。それはすぐに、その木の逃げ込み場所に帰って、捕まえたばかりの獲物をむさぼり食いました。

王女は、その虫は即死であって、何の痛みもないように望みました。そうは言っても、自然とはそういうものではないでしょうか。それは、生と死、痛みと喜び、という対照的な世界の継続する循環、そこでは、ほとんどののどかな環境においてさえも、死は、絶えず付きまとうものなのです。そして、この時に、王女は、彼女をとりまく環境の中で、彼女自身の強烈な性格は、自然の母なる女神の影響であることを感じ、悟ったのでした。

幸せな王女は一日中、森の中で過ごし、それは大変穏やかな日だったので、彼女にはアツという間のことのように感じました。彼女がそれを知る前に、太陽はゆっくりと地平線に沈み始め、赤とオレンジ色のマントの中に入ろうとしていました。それは、夜に花びらを閉じようとしている、情熱の木の花の色と合っていました。

王女は、荘厳な日没に驚き、彼女の眼を閉じて、深く長い呼吸をして、消えつつある太陽の清浄な活力を吸収しました。

暗闇が空気を満たし始めたので、王女は彼女の召し使いたちに、宮殿に帰る時間であることを知らせました。王女と召し使いたちが森を歩いて帰る途中、プトリ・サリキットは夜のこうもりが、遠く離れてかん高い音を出しているのを聞きました。羽のある生き物が新月の空を飛んで、暗闇の空の中間飛行のうちに昆虫を捕らえているのを見上げました。彼女は、虫たちを除去して、森の中にある最も高い木の枝のてっぺんのとまり木に帰る、曲芸的なこうもりをずっと見ていました。彼女が驚いたことには、それらが枝から、逆さになってぶら下がり、夜の毛布のように、それらの革のような羽を折りたたんでいて、彼らは眠った時、どのようにして木から落ちないようにしているのでしょうか？

王女がこうもりたちを安らかな眠りに着かせると、彼女はあたりを見回し、彼女が木々の間に残されていることを知りました。召し使いたちへの印はありません。彼女の自然への没頭が、時間を失わせ、方向を失わせました。暗い林でしたが、彼女は用心して歩き、王女は突然、自分が攻撃を受けやすいと感じ、守りのために剣があれば、と思いました。

王女が森の中を歩いていると、木々は、今は美しくは見えませんでした。もはやそれらは真っ直ぐ

でも、立派でもなく、冷たい月の光の中で、ねじれて、節くれだって、奇怪な形をし、びっくりするような輪郭をしていました。そして、どういうわけか、その森は夜に、大きくなったように思えるのです。彼女は何時間も歩いているのですが、彼女は恐ろしい木々の終わりをを見つけることはできません。その木のねじれた枝は、彼女に手を伸ばして、まるで悪い骨のような指が彼女に来るように招いているようでした。

突然、王女は草むらからキラリと光るふたつの目が彼女を見つめているのを見ました。彼女は、どういうゾットとする生き物が彼女をつまみまわして、彼女の混乱した想像力にいたずらを始めたのか、といぶかしく思いました。彼女がどの方向に振り向いても、その目はついて来るのです。緊張は耐えられないものでした。

ついに、王女は父が恐怖に直面した時にするように、といつも教えていたことを実行することにしました。彼女は急いで二つのキラリと光る目の方に振り向いて、大きな声で叫びました。「正体を現しなさい。」突然、よだれを垂らしたおおきな歯を持った巨大なイノシシが暗い茂みから出てきました。出現したその動物は、鋭い歯で歯ざりとうなり声をあげて、無防備の王女のほうに向かってきました。彼女はすぐに、反対の方向に、できるだけ早く走りました。

地面は、その現れた生き物の爆走の重さに、揺れました。王女は、木々の間を、ありったけの力で走りました。彼女の、森の暗闇に対する恐れは、今や生きたまま食べられる恐れの下にかくれました。突然、王女は地面を走り出しました。彼女は身震いするように立ち止まりました。彼女が森の端に着いた時、大変急勾配の断崖の先に、よろめいて立っていたのです。彼女には考える時間はありませんでした。現れた動物の熱い息が彼女の首の背後にかかっていたのです。王女は、悲鳴をあげて、断崖から、暗やみの中に飛び込みました。

彼女はどれくらいの時間、意識を失っていたかわかりませんが、王女はゆっくり目を開けました。そこは、まだ暗闇でした。彼女は大きな火が、炎となって、この火のとなりには死体がよこたえられているのに驚きました。その死体は森で彼女をずっと追っかけていたイノシシの巨体だったからです。王女は自分の体が、崖から落ちて傷ついているのではないかと、思って体を見ましたが、ほとんど痛みを感じず、小さな傷があるだけでした。彼女がもう一つ驚いたことには、これらの切り傷は薬草に覆われていたのです。「王女様、あなたの傷は重くはありません。」暗闇から不思議

フィリピンの神話と伝説

な男の声が聞こえてきました。びっくりした王女は、目をあけてチラッと見て、ゆらめく火の炎の影になっているすてきで、不思議な姿に驚きました。

「私の名前は、ラハ・マガラムです。」と不思議な男は言い「そして、私はあなたの叫び声を聞き、崖の下のあなたを見つけた者です。」と言い添えました。彼は火のとなり横たえられたイノシシを指しました。「そのイノシシはもうあなたを煩わすことはないでしょう。」

王女は彼女の命を救ってくれた王子に感謝しましたが、当惑もしました。「あなたは私が王女であることをどうして知っているのですか？」と彼女は聞きました。「王子は微笑んで、「私は何年もあなたの優雅さと美しさに敬服しています。」「しかし、私の父はあなたのことを一度も話したことはありません。」と王女は言いました。王子は、王女への好意にも関わらず、彼が彼女の父に近づけなかった理由を説明しました。彼は、相手の女性が心から彼のことを愛していることを知るまでは、だれにも結婚を申し込まないのです。

そして、王子は彼自身と王女のために集めた果物を出しました。彼らは共に食べ物を分かち合い、彼らは長い時間、彼らの生活、子どもの頃の話、彼らの夢や目標について話しました。彼らは大変長い時間話したのですが、彼らには長い時間とは感じませんでした。彼らはお互いが魅力的な相手であり、世界のどこにも、ほかにそんな人はいないことがわかりました。彼らは生涯を共にすることが運命付けられていると感じました。

王子は王女に口づけし、彼女の手を彼の胸において、彼女に、夜が明けて、スルタンの宮殿まで行けるように明るくなったらすぐに、彼女の父に結婚の承諾をもらえるように頼むことを約束しました。彼女は心の内に、彼女を王子と一緒にになれるように取り計らってくださった母なる自然の女神に感謝しました。

彼らは火のとなりで座って、お互いに暖かく腕に抱き合いました。今から、何者も彼らを分けたり、お互いの結ばれた愛を壊すことはできません。

次の朝早く、ふたりの恋人は、彼らの安らかな眠りから、彼らの名を呼ぶ、遠い声に起こされました。一団の声は王女の名前を呼び、もう一団は王子の名前を呼びました。しかし、王子を呼ぶ声は、急いで彼の父の宮殿に帰るように警告している声でした。それはスペインの軍隊がその力によ

て、全領土を手に入れようとしている、というものでした。

ラハ・バガランはプトリ・サリキットの手をしっかりと握り、彼女の深い魅惑的な目を見ました。「私はすぐに出かけなければならない。私の父と私の民は私を必要としている。」と彼は言いました。

王子は彼の頭を垂れました。「あなたはあなたの父の所に帰らなければならない。」彼は王女に安心させるような微笑をあたえ、暖かな口づけをしました。「私のあなたへの愛は、これらの外国に侵入者への憎悪と同じくらい強いのです。私は彼らを負かせます。そしてあなたの腕に帰ってきて、あなたを私の妻にします。」

王女は泣いて、呟きました。「親しきアラアの神よ、私の愛するこの男をどうか守ってください。どうぞ私たちの民と土地をお守りください。私たちが略奪者のスペイン人の残酷な手に落ちることを許さないで下さい。」

王女に最後の口づけをして、王子は彼の馬に乗り、去っていきました。王女は、彼が地平線の小さな点になるまで、彼を見ていました。彼女は深いため息をついて、彼女を捜している人々を呼びました。「ここにいます。私は大丈夫です。」

王女は彼女の地に帰り、父やスペイン軍と戦っている彼の軍隊と合流しました。その戦いは長くくさまじいものになり、双方に多くの命が失われました。王子は勇ましく戦い、スペイン人を負かしてその地から追い出しましたが、最後の戦いで彼はスペインの剣によって、致命的な傷を受けました。彼は血まみれの戦場で死にました。彼は侵略者たちを負かしたことを知ったのは幸いでしたが、悲しいことに、彼は愛する王女にもう一度会い、死の息の中で、別れを告げることができませんでした。

プトリ・サリキットはラハ・バガラムの死の知らせを聞きました。王女は、すっかり深い苦悩に圧倒されました。彼女はわめき、かん高い悲鳴で痛みを表わしました。それは大変強いもので、それによって、空では太陽が光を失い、風は吹くことをやめ、暗い雲が地を覆いました。暗い灰色の霞によって覆い隠され、悲しみに打ちのめされた王女の深い苦悩を反映していました。

彼女はひざまずいて、空の方向を見上げ、彼女の黒真珠のような目は今、涙で溢れ、アラアを呼び続けました。「どうして、どうしてあなたは彼を私から取られたのですか？ どうして？」しかし、

フィリピンの神話と伝説

王女は心の中では、何故王子がこの世の生活から取られたのか知っていました。

ラハ・マガラムは、将来の世代の模範として、殉教者になるために死ななければならなかったのです。彼の死は、ミンダナオとその周りの国々の人々が、外国の侵略に何があっても屈服しないための、力と鼓舞するものの源となることでしょう。

彼女は、愛する王子が崇高な理由で死んだことは知っていましたが、それは王女の苦しみを取り除くことはできませんでした。すすり泣きながら、彼女は自分の部屋へ走ってゆき、ドアに鍵をかけて、静かにひとりで、泣き、悲嘆にくれていました。

数日後、スルタンは、悲嘆にくれた娘が鍵をかけた部屋で泣いているのを聞いていることはできなくなりました。彼は心配になり、兵隊たちにドアを壊すように命じました。

スルタンが部屋に入った時、彼のかわいい娘、プトリ・サリキットは、どこにも陰も形もありませんでした。王女のベッドの上には、彼女の枕が置かれていて、その枕の上に、スルタンは、彼が王国で今までに見たことのない、不思議な珍しい花があるのを見つけました。

スルタンは、身長にその花を枕から摘み取りました。その花は深紅色でした。その強い茎は、チクチクするとげで覆われ、スルタンが今までに嗅いだ最も甘い香りを放っていました。そしてスルタンは枕の上に置かれたメモを見ました。それは彼に宛てた、プトリ・サリキットからのものでした。

手紙の中で、王女は父を残すことをわびました。しかし、彼女は、彼がその花を植えて、それを育て、国中に広げることを希望しました。その植物の深紅色の花は、ミンダナオの人々に、彼らが自分たちの国を守るために流した血と、王子が人びとのために行った犠牲を永遠に記憶させるものとなるでしょう。花の甘い香りは、王女が、ラハ・バガラムと一緒に分かち合った、彼らの国とかれらの民にささげた愛を人々に永遠に記憶させるものになるでしょう。花のチクチクしたとげは、王子と王女がスペインの侵略者に対する嫌悪を人びとに永遠に記憶させるものになるでしょう。

プトリ・サリキットの臨終の願いであるその花は、彼女の民が決して外国の侵略者に屈服せず、常に彼らの解放と自由のために戦うことを、常に記憶させるものになるでしょう。

スルタンは珍しいこの花を植えて、すぐに国中に広がりました。彼の晩年には、それは彼の愛する分かれた娘を常に思い出させるものになりました。

やがて、ミンダナオの人々は、この珍しい花を「バラ」と呼ぶようになり、それに対する敬意を忘れることはありませんでした。

フェルディナンド・マゼランが1521年にフィリピンに来て、スペインのために土地を要求し、かれらの王フェリペ 世のために、価値のある資源や香辛料のある土地を略奪して不当な利用を望んだのです。しかし、彼はその代価を知ることになります。ミンダナオの土地の祖先は、ラハ・バガラムとプトリ・サリキットの犠牲を忘れませんでした。すさまじい、力あるイスラム教徒の戦士ラプラブはマゼランを殺したのです。

その次の350年間、スペイン人は彼らの侵略と占領を続けた土地を「パラス・ング・シランガン」あるいは「東洋の真珠」と呼びました。彼らはアーチペラゴの人々を二つに分けました。バガン・マライスは「インディオ」、イスラム教徒ノマライスを「モロス」。その名前は北西アフリカのイスラム教徒からとっています。彼らはすべてのイスラム教徒のモロスを殺して、バガン・インディオをキリスト教徒にしようとしていました。

しかし、この350年の占領で、スペイン人は勇敢ですさまじいモロス、ミンダナオの人々を征服することはできませんでした。彼らは解放と自由のために、彼らの愛する王女の最後の願いに従って戦ったのです。彼らの支配者は、彼らの民にバラの重要性と、ミンダナオの王女の遺産を忘れさせませんでした。

19世紀に、アメリカがスペインに取って代わった時でさえ、勇敢なイスラム教徒は、外国の帝国主義に屈服することを拒否し、彼らの土地の解放のために戦い続けました。

素晴らしいバラは、今もミンダナオの地で花開き、王子と王女の遺産は、勇敢で高潔なイスラム教徒の心と思い生き続け、今日も彼らの土地を守るための戦いに結びついています。